

# 若紫巻の源氏歌「いはけなき鶴の一声聞きしより」について

徳岡 涼

## 一 はじめに

『源氏物語』の若紫巻は、教科書にも採られる源氏と紫の上とが北山で出会う場面を有し、これまでも様々な角度から分析が進められ、多くの論文が書かれてきた。

本稿では、若紫巻の以下の場面を採り上げ論じてみたい。周知の通り、源氏は北山で紫の上（当該巻では、若紫とすべきだが、一般的な呼称の紫の上で統一する）を見初めてからというもの、下山後も、歌を贈り続けている。尼君の京の邸において、紫の上の将来を託された源氏であったが、既に就寝中という紫の上に逢うことは叶わない。そこで、翌日、改めて歌を詠み贈る場面である。少し長くなるが、論述の都合上、前の晩からの描写から引いておきたい。

いと近ければ、心ほそげなる御声絶えぐ聞こえて、「いとかたじけなきわざにも侍るかな。この君だにかしこまりも聞こえたまつべきほどならましかば」との給ふ。あはれに聞き給ひて、「何か、浅う思ひ給へむ事ゆゑかうすきぐしきさまを見えたてまつらむ。いかなる契りにか、見たてまつりそめしよりあはれに思ひきこゆるも、あやしきまでこの世の事にはおぼえ侍らぬ」などの給ひて、「かひなき心地のみし侍るを、<sup>①</sup>かのいはけなうものし給ふ御一声いかで」との給へば、「いでや、よろづおぼし知らぬさまに大殿籠り入りて」など聞こゆるをりしも、あなたより来るおとして、「上こそ。この、寺にありし源氏の君こそおはしたなれ。など見たまはぬ」との給ふを、人くいとかたはらい

たしと思ひて、「あなかま」と聞こゆ。「いさ、見しかば心地のあしき慰みき、との給ひしかばぞかし」と、かしこきこと聞こえたりとおぼしての給ふ。いとをかしと聞い給へど、人々の苦しと思ひたれば聞かぬやうにて、まめやかなる御とぶらひを聞こえおき給ひて帰り給ひぬ。げに言ふかひなのけはひや、さりともしよう教へてむとおぼす。

又の日も、いとまめやかにとぶらひきこえ給ふ。例の小さくて、

いはけなき鶴の一声聞きしより葦間になづむ舟ぞえならぬ

同じ人にや。

とことさらをさなく書きなし給へるも、いみじうをかしげなれば、やがて御手本に、と人々聞こゆ。

（『新日本古典文学大系一』

（以下、『新大系』と略。一八〇～一八一頁・傍線稿者）源氏の贈歌には、『古今集』「堀江こぐ棚なしをぶね漕ぎかへり同じ人にや恋ひわたりなむ」（七三二・恋四・読人しらず）、『古今和歌六帖』「入り江こぐ思ほゆるかな」が、引き歌とされてきたことが『源氏物語引歌索引』からわかる。同書に拠ると、『源氏釈』（前田家本）「みなといりのゝおなじ人をや恋しと思ひし」、『源氏釈』（書陵部本）

「<sup>ほりえこぐ</sup>みなといりのゝをなじ人をや恋<sup>し</sup>たりなん」、『紫明抄』「おなじ人をやこひんと思ひし」、『異本紫明抄』「みなといりのゝ同じ人をや恋わたるべき」、『源氏物語古註』「同じ人をや」、『河海抄』、『一葉抄』・『休聞抄』「恋わたるらん」、『紹巴抄』・『花屋抄』「恋わたるべき」、『孟津抄』「入江こぐ」等異同はあるが、同歌の指摘が続いている。稿者も、この歌が引き歌であることに、異論はない。だが、研究史を辿ってみると、源氏歌の理解が一様でないのだ。

## 二 源氏歌の引き歌についての研究史

藪葉子氏<sup>(2)</sup>は、「源氏物語」に、二度以上引用されている歌」が、「古今和歌六帖」にある場合、その過半数は、歌題の第一首目から第三首目に位置している」ことを説かれる過程で、「堀江漕ぐ」の歌は、「真木柱」巻の近江の君の発言にも出てくることを指摘され、以下のように述べられている。

近江君は、「ほり江こぐ」の歌の引用によって、夕霧が雲井雁だけに執着することをからかいつつ言い寄るのだが、先立つ常夏巻の弘徽殿女御への消息での、彼女の古歌の稚拙な引用の仕方を思えば、この「ほり江こぐ」という引用歌もまた、当時の人々には近江君

程度のレベルに合う歌として考えられていて、作者は注意深く選択していると考えられる。源氏が、故意に子どもっぽく書いた紫上への消息は、幼い紫上が十分理解できるよう古歌の選択にも配慮し、字体・内容ともに気配りがなされているものと考えてよいだろう。

幼い紫の上に対する配慮という点では、久富木原玲氏は、源氏歌が「鶴・葦間・なづむ舟・江」といった縁語仕立ての歌である」という『新編日本古典文学全集』脚注からの指摘を受けて、「舟」と「なづむ」の結びついた歌として、『土佐日記』の「来と来ては川上り路の水を浅み船もわが身もなづむ今日かな」(五〇)を、「舟」と「我が身」の対比という点から、『和泉式部集』の「なにはがたみぎはのあしにたづさはるふねとはなしにある我が身かな」(二八四)を掲げた上で、

「なづむ」と「舟」との組み合わせからいえば源氏の歌は『土佐日記』だが、難波潟の葦に行きなづむ舟に自己をたとえた和泉との関連も考えられないわけではない。源氏の歌には難波潟は詠まれていないが、この歌が若紫も読めるように「ことさら幼く書きな」されており、女房たちがこれを「御手本に」と言っているところから察すれば、これ以前に源氏が若紫を所望したときに、尼君が「まだ難波津をだにはかばかしう

つづけはべらざめれば」と応えているのを受けたものであろう。則ち、手習いの始めにお手本にする「難波津」の歌も習得していない若紫のために詠まれたのが「いはけなき」の歌だったとも思われるのである。

久富木原氏の論では挙げられていないが、源氏歌の二番目の引き歌として、『拾遺集』の人麿歌「みなと入りの葦わけ小舟さはりおほみわが思ふ人に逢はぬころかも」(八五三)を、『奥入』以来の注釈書は掲げている。「なづむ」という言葉はないものの、葦が舟の往来を妨げる恋歌の一表現であり、源氏歌には、そのような側面もあることが首肯される。

幼い紫の上への配慮のもとに詠まれた歌という点では數氏と、久富木原氏とは同意である。ここで注意しておきたいのは、甲斐陸朗氏が、問題にしている源氏歌の消息について、

この消息は、書式やそこに記した文字は受け手である若君を配慮しているが、歌の送り先は尼君であって、若君は歌の中に詠み込まれてしまっている。

と述べられていることである。実際、甲斐氏のような理解が、正鵠を射ている。

また、声を慕うということに着目された鈴木宏子氏の論もある。氏は、源氏歌には、次の『古今集』からの影響が

あると見られ、以下のように説かれる。

初雁のはつかに声を聞きしより中空にのみ物を思ふかな  
（『古今集』恋一・四八二）

この『古今集』歌と光源氏の歌は、愛する人の声を「鳥」の鳴き声の比喩で捉えること、第三句に「聞きしより」という歌句を据えること、声を聞いて以来慕う一方である恋心を鳥の縁語（『古今集』歌Ⅱ初雁・はつか・中空／光源氏の歌Ⅱ鶴・葦間・舟）によって表現すること、という三点で共通している。一般に恋歌において「一目見る恋」と対になるのは「音に聞く恋」、つまり噂に聞いて恋い慕うことであり、恋人の「声を聞く」ことに言及する例はあまり多くないようだ。（略）光源氏の求婚歌群も『古今集』のこうしたあり方をなぞるかのように、「声を聞いた」ことを関係再開の端緒とした。

源氏歌が躬恒歌と相似形であることは、明快である。以上の諸賢の指摘から、源氏歌の背景の多様さが理解出来る。一方、『花鳥余情』に以下のような注が付けられている。

ひめ君の御こゑを、源氏の君、一ひは、きかぬやうにし侍りしかとも、なにかきかぬとは、御めのとをはしめて思へきならねは、たつの一こゑとよみてやり給へる也。かやうの事は、世間につねにある事なり。

（『源氏物語古註釈叢刊 第二巻』）  
それは、例えば、現代注釈書の『源氏物語の鑑賞と基礎知識 若紫』においても、

前後は、屋敷の人々にとってはなほだ不都合な紫の君の言葉を、聞こえぬ素振りて退出した源氏であつたが、翌日の消息に「鶴の一声」と詠み込んでいる。幾つかの古注釈ではこのことを取り上げているが、「なにかきかぬと御めのとをはじめて思へきならねは、たつの一こゑとよみてやり給へるなり」（『花鳥余情』）に見られるように、得意げに話す幼い姫の言葉が耳に届いていたことは、屋敷の人々にとつても自明のことであつたものと思われる。したがって、この歌は、屋敷の人々に諸諱を含む歌として受け取られたことであるう。

と継承され、諸諱を含む歌という位置づけを得ている。確かに、聞かれてしまつては困る紫の上の声を「鶴の一声」に喩えていると見た場合、諸諱を帯びているように思われる。そのことと、いとしい人の声を聞くことをこれまで用いられてこない歌ことばの組み合わせで表現し、関係を再開させようとした真剣さとは、結びつかないように感じられる。「いはけなき鶴の一声」の本質の理解が曖昧なのではないか。この歌ことばの背景を探ることから始めたい。

### 三 鶴の歌と漢詩と

和漢に渡る文学における鶴の表現については、先行研究が豊富にある。『万葉集』における鶴の歌については、鈴木久美氏に論がある。氏は『懷風草』に見られる鶴は、「仙境」というテーマと密接に関わるか、または中国風の物言いであるか、といった使われ方をしている」とされ、『万葉集』では「仙禽のイメージが生きて」おらず、「専らその生態から受ける印象によって、主に「望郷」を主題とした歌に、効果的に用いられていた」と説かれた。

また、片桐洋一氏は、「松鶴図」に着目され、「松や鶴を瑞祥として扱ったのは、当然のことながら、不老長寿を願う神僊思想において著しい」と述べられ、『淮南子』、『文選』等をその典拠に上げられる。そこから、勅撰漢詩集、あるいは庭園、屏風絵などへの影響があり、最終的に賀歌に取り込まれたという見取り図を示される。

漢籍方面の鶴の表現は、坂井多穂子氏、柴格朗氏に、それぞれ白楽天、劉禹錫における考察が備わる。坂井氏は、白居易の詩の鶴は、仙人、長寿の老人、在野の賢人等の喩えに用いられると同時に自らをも喩える場合があるという。柴氏は、白楽天と劉禹錫の交流から詠まれた「鶴歎」という詩語に着目される。これは更に、山田尚子氏が、日

本漢籍で、辞表が認められなかった時に用いられる「鶴歎」「鶴望」、あるいは「鶴唳」などを検討されたことに繋がる。詠み手の地位や身分の進退に関わる嘆願の典故の一つには、『毛詩』小雅「鶴鳴」篇、「鶴鳴于九臯、声聞于野。」（鶴九臯に鳴く、声野に聞こゆ）（中略）鶴鳴于九臯 声聞于天（鶴九臯に鳴く、声天に聞こゆ）」があるという。

「鶴鳴」篇の述懐歌への影響については、本間洋一氏、田中智子氏が論じており、例歌に、以下が挙げられる。

このうたをたてまつらするに、おほせごとのたぶる藏人につかはす

天つ風空に吹きあぐるひまもあらば沢にぞたづは鳴く  
と告げなん

（『順集』・二九八）

申ぶみにかきて奉る

沢水に老いのかげみゆあしたづの鳴くね雲ぬきにきこえ  
ざらめや

（『兼盛集』・八二二）

それらとは別に、定子母の『詞花集』にも載せられる歌がある。『栄花物語』（巻第五・浦々の別）から引用する。

……これを聞きたまふまに、但馬にも播磨にもいみじう思しおこす。母北の方うち泣きたまひて、夜の鶴都のうちに籠められて子を恋ひつつも鳴き明かすかな

（『新編日本古典文学全集』二二五七―二五八頁）

長徳の変の後、尹周、隆家が配流され、我が子との再会を哀願しつつも叶わない親心が、余すところなく表現されている。この典拠とは、『白氏文集』『五彈弦』で、『和漢朗詠集』にも載せ人口に膾炙していた。前後を略して掲げる。

第三第四弦冷々 第三第四の弦は冷々たり

夜鶴憶子籠中鳴 夜の鶴、子を憶うて籠の中に鳴く

〔『和漢朗詠集』巻下・管弦付舞妓・四六三・

『角川ソフィア文庫』

右に説かれてきたものは、成鳥である鶴の鳴き声に関する歌である。しかし、源氏歌には「いはけなき」とあるからには、雛鶴が鳴くという場合を考えなければならぬだろう。雛鶴の鳴き声は、一帯の空気を振動させるような成鳥の声とは異なる。次の節では、雛鶴・子鶴の和歌の系譜を辿ってみたい。

#### 四 雛鶴が鳴くこと

小嶋菜温子氏が、当該源氏歌を検討される折に、産ぶ屋の賀歌を掲げられたことがある。氏が、八代集から挙げられた「産ぶ屋」に関わる賀歌に、鶴の雛や子の歌があった。

ある人の産して侍りける七夜 元輔

松が枝のかよへる枝をとぐらにて巢立てらるべき鶴の

雛かな 〔『拾遺集』雑賀・一一六六〕

正月一日子生みたる人に、むつきつかはすとして  
よめる 伊勢大輔

めづらしく今たちぞむる鶴の子は千代のむつきを重ぬ  
べきかな 〔『詞花集』賀・一六二二〕

確かに、産ぶ屋の歌には、雛鶴や鶴の子が詠まれる。やはり、『元輔集』に、

人の子うみて侍る七日の夜

たづの子の雲井にあそぶよはひこそ空にしらるる物にはありけれ 〔『元輔集』・五四・五五〕

とある。一方、彰子入内の折の屏風歌にも、雛鶴の歌があり、賀の歌に広げると多くの用例が見いだされそう。

翁の鶴かひたる所

ひなづるをすだてし程に老にけり雲井の程を思ひこそ  
やれ

花山院の御、いれり

ひな鶴を養ひたてて松原の陰にすません事をしぞ思ふ  
〔『公任集』・三〇五・三〇六〕

しかし、右の歌は、新生児や幼児を鶴の雛に喩えているだけで、「声」が詠まれていない。改めて、雛鶴の声に留意して、私家集を検すると『元真集』一八八番歌が見いだされた。



ひとの子うみたる七夜

雲井にもいまはまつらむあしへなる声ふりたつるつる  
のひな鳥

（『元真集』・一八八）

また、『源氏物語』との前後関係は不分明ながら、道長の歌がある。

蔵人少将、子むませたりける七日の夜、とのよりつかはす、すはまに

葦田鶴を撫で生してしかいあればたちてし雛の千代こそぞまつ

（『御堂関白集』・二九）

実は、先の『元真集』は、続けて以下の歌を載せる。

冬の夜のながきをおくるほどにしも暁方の鶴のひと声

（二八九）

「鶴の一声」が、歌ことばとして用いられるのは、『源氏物語』以前には、『元真集』以外には見出されない。無論、元真歌の「鶴のひと声」は成鳥の声であり、源氏歌にいう雛鶴の声と内実は異なる。しかし、一八八歌に詠まれる情景は、「あしへ（葦田）」で「つるのひな鳥」が鳴くもので、源氏歌と近しく、隣り合う一八八番歌と、一八九番歌の歌ことばとが、源氏歌に直接的に影響を及ぼしたのだらう。

ところで、金田圭弘氏は、源氏歌「いはけなき鶴の一声」を送った後日、尼君を弔問した折に詠まれた、

あしわかの浦にみるめはかたくともこは立ちながら返

る波かは

（『新大系二』一八四頁）

を採りあげ、「あしわかの浦」に紫の上が喻えられていることから、赤人の以下の歌を引き歌と見られた。

若の浦に潮満ち来れば渴をなみ葦田をさして鶴鳴き渡る

（『万葉集』巻六・九一九）

そして、「いはけなき」の源氏歌に、「赤人が詠んだ「若の浦に：」の歌に見える「鶴」に紫の上を喻え、また、赤人歌の「葦田」に対して「葦間」が詠み込まれている」と説く。その際、「あしわかの」を有する希少な例歌に、

なにはがたこげどを船はあしわかのえざるほどこそひ

さしかりけれ

（『元真集』・六〇）

を挙げられており、興味深い。なぜなら、葦に妨げられ、あしわか（葦若）を得る困難さを詠んだ元真歌は、問題にしている源氏歌とも通うからである。

さて、論を元に戻したい。源氏歌は産ぶ屋の歌ではないことから、小嶋氏は、先掲の論の中で、以下のように述べられている。

若紫の「鶴」の歌と、「産ぶ屋」の賀歌にみる「鶴」の歌との階梯は明白であらう。「産ぶ屋」の賀歌ならば、生まれた子の〈家〉と〈血〉の繁栄が願われるところだ。ところが、若紫巻の「鶴」の歌は、〈家なき子〉若紫の「いはけなき」による「ゆゆしさ」を抱えこみ、

源氏の闇雲な執着が発露される場となっていた。

とし、「その（稿者注・源氏が「いはけなき」の歌を贈った）前後、藤壺との密通、そして懷妊という「賀<sub>二</sub>慶祝<sub>一</sub>」の時空とは全く異質な文脈に挟まれている」という。一体、源氏の歌は、何を意図しているのだろうか。

改めて、雛鶴の鳴く賀歌を読み解くと、雲井に向かって鳴く鶴という点から、『毛詩』『鶴鳴』篇が下地にあり、生まれた子が宮中で時を得ることを言祝いでいる。しかし、源氏歌は、賀歌ではないので、『毛詩』や、瑞祥の象徴とは一線を画している。定子母が、長徳の変の折、息子達を案じて詠んだ如く、個人的な紫の上への心情を訴えたものである。紫の上の現状と、源氏の歌について今一度慎重に辿りなおしたい。

## 五 紫の上の孤独

かつて、藤原克己氏が、紫の上を「みなし児同然のような境遇」と述べられたが、尼君は、尼君自身の死を悟った折り、紫の上の母が、父を亡くした時のことを理解していたのに対し、紫の上は、頼りない様子であることを、案じていた。これは、紫の上が、母の死を理解出来ていなかったことを暗に示している。

尼君、髪をかき撫でつゝ、「梳る事をうるさがり給へど、をかしの御髪や。いとかなうものし給ふこそあはれにうしろめたけれ。かばかりになれば、いとからぬ人もあるものを。故姫君は十ばかりにて殿にをくれ給ひしほど、いみじうものは思ひ知り給へりしぞかし。たゞいまおのれ見捨てたてまつらば、いかで世におはせむとすらむ」とていみじく泣くを見給ふも、すゝろにかなし。

（『新大系一』・一五八―一五九頁）

まして、実父の兵部卿宮を慕ってはいない。源氏が、二条院に紫の上を引き取る若紫巻卷末部分に、

：君は、をとこ君のおはせずなどしてさうぐしき夕暮れなどばかりぞ尼君を恋ひきこえ給ひて、うち泣きなどし給へど、宮をばことに思ひ出できこえ給はず。もとより見ならひきこえ給はでならひ給へば、いまはたゞこの後の親をいみじう睦びまつはしきこえ給ふ。

（同・一九七―一九八頁・傍線稿者）

とあり、親としての範疇にすらなかった。尼君が亡くなったあと、「君は上を恋ひきこえ給ひて泣き臥したまへるに」（同・一八四頁）と慕っていることから、尼君こそが、親代わりであったことが看取される。

尼君邸を訪れた前の晩に、源氏は、紫の上のいはけなき声を所望していた（第一節、傍線部①）。その箇所に、『新



大系』脚注は、「あの幼くていらつしやる（雛鳥のような）一声をぜひ（聞かせて欲しい）。すぐあとの歌に「いはけなき鶴の一声」と受けられる。僧都の言葉に「まだむげにいはけなきほどに待めれば」とあった」という。

ここで、紫の上は、「上こそ。この、寺にありし源氏の君こそおはしたなれ。など見たまはぬ」と、源氏を歓迎していたが、これは、病む尼君の所望を受けてのものであった。この声を、源氏は耳にしていたことから、源氏歌の「いはけなき鶴の一声」を、前夜の紫の上の声と理解するのが右のように一般的だが、そうではないのではなからうか。

源氏は、北山で庇護者である尼君に、歌を贈り続けている。

① 初草の若葉のうへを見つるより旅寝の袖も露ぞかわかぬ  
（『新大系』・一六四頁）

夕まぐれほのかに花の色を見てけさは霞の立ちぞわづらふ  
（同・一六九頁）

面影は身をも離れず山桜心の限りとめて来しかど

（同・一七四頁）

紫の上への思慕が、「若草の若葉のうへを見つるより」「夕まぐれほのかに花の色を見て」「面影は身をも離れず」と繰り返される。北山での垣間見以来、源氏は、紫の上の姿を目に焼き付け、片時も忘れることが出来なかった。

問題の源氏歌には、「同じ人にや（恋ひわたるらむ）」が添えられており、これはまさに春から秋の末まで、紫の上に、変わらぬ思いを抱いていたことを示している。それらの延長線上に、「いはけなき鶴の一声聞きしより」を置いてみる。すると、源氏が初めて耳にした紫の上の声とは、北山で「雀の子をいぬぎが逃がしつる。伏籠のうちに籠めたりつるものを」（同・一五八頁）とあったことが思い起こされる。この直前の紫の上の様子が、

髪は扇をひろげたるやうにゆらくとして、顔はいと赤くすりなして立てり。  
（同・一五七―一五八頁）

とあり、原岡文子氏が、以下のように述べている。

一方、その走る姫君は、「顔はいと赤くすりなし」た様であった。こすつてひどく赤くなった顔は、その一瞬間の泣きじやくった大声を証し立てるものにほかない。

源氏歌の「いはけなき鶴の一声」とは、本来なら親を慕って泣くべき紫の上が、探し求めていたのは雀の子であった、という悲劇を捉えた初句であった。北山の場面で、この歌が詠まれなかったのは、源氏は、尼君を親だと誤解していたからである。つまり、親、あるいは親代わりという視点を持たないと、この歌を詠めることは出来ない。

以上のように読み説くと、三田村雅子氏が、北山での垣

問見の場面が、先行の物語（特にうつは物語の仲忠から兼雅に及ぶ垣問見と引取）の話型や表現、素材と比較され、「それが我が子発見の物語のパターンと重なることの多いことを指摘」されてきたことと、あるいは、倉田実氏<sup>(20)</sup>が、先掲した若紫巻末傍線②の「後の親」から、二人の関係を、次のように説かれたことにも相通じ、物語の輪郭が鮮明になってくる。

光源氏と紫の君との関係は、世間に公表されない秘められた父と娘であつた。養親と養子女は、擬制的親子関係とされ、この二人も規定してみれば、この関係と見ることもできよう。しかし、擬制的と規定しても何の意味もないほど、理想的な父と娘である。

鶴の親子関係を示す典故としては、『易経』「繫辞上伝」が考えられる。実は、この源氏歌への「繫辞上伝」からの指摘は、堀淳一氏<sup>(21)</sup>が、明石巻の源氏の心中描写の中にでてくる「退きて咎なし」という表現の典故を博搜される過程で、問題の明石巻に密接な繋がりのある須磨巻の頭中将との邂逅の場面に、次の『易経』「繫辞上伝」からの影響を示され、当該源氏歌も引かれていた。

鳴鶴在陰 其子和之 鳴鶴陰に在り、其の子之に和す。  
我有好爵 吾與爾靡之 吾、爾と之を靡にせん。

〔『易経下』繫辞上伝・第八章『新釈漢文大系』〕

『新釈漢文大系』の語釈は、以下のようである。

中孚<sup>三</sup>の爻辞である。九二は陰位に陽爻が位しており、不正ではあるが、剛中であるので「中孚の実」を得たものとされる。「爵」はもとさ、かずきの意。転じてさかずきを賜る爵位のこととされるが、すぐれた爵位には実がともなっていないなければならないことから、忠実の徳の意ととる。「靡」は共にするの意。鶴は沢中の鳥であり秋に感じて鳴く。すると六三にあたる子鶴も陰陽相對応じて、和して鳴く。九二に中実の徳（爵）があるから、これを爾と共に分かちあおう、ということである。

堀氏も掲げられているが、この一節の日本における享受として、早く道真の七言「仲秋<sup>(22)</sup>秋稊、聞講周易、賦鳴鶴、在陰」（傍点稿者）がある。

暗知鳴鶴驚秋氣 暗に知る、鳴鶴の秋氣に驚くことを。  
一叫先穿數片雲 一たび叫きて先づ穿つ、數片の雲。  
縱使清聲千萬和 縱使、清聲に千萬和するとも、  
不用十翼豈高聞 十翼を用ずんば、豈に高く聞へんや。

〔菅家文草』卷第一・五五）  
『日本古典文学大系』頭注にも述べるように、「十翼」とは、孔子の著作とされる易の注釈書だが、この「十翼」の重要性を、鳴鶴と比して説くところに主眼があり、源氏歌に直

接的な影響があるわけではないが、既に、「繫辞上傳」からの確かな享受を見て取れる。

三史五経の経の筆頭である『易経』から、『源氏物語』への影響は、やはり、看過できない。源氏歌は、「鳴鶴在陰 其子和之」を、まるで判じ物の如く用いて、親のない紫の上の現状を示すとともに、自身の親代わりの立場を表明したのだといえよう。

もう一度、源氏歌の主たる形成要素を確認しておきたい。古注釈や先学により指摘のあった『古今集』四八一番歌、七三三番歌や『拾遺集』八五三番歌の恋歌を引き歌としながら、葦辺に鳴く雛鶴の情景を詠んだ『元真集』の一八八番歌、及び一八九番歌の中の歌ことば「鶴の一声」を巧みに取り込み、その実、意味するところは、「親鶴に和して、鶴の子が鳴く」という『易経』「繫辞上傳」を背景にした密度の濃い一首だったのである。

はからずも、北山での垣間見にまで、論が及んでしまっただが、紫の上が慕っていたのが雀である事に関して、少し付け加えておきたい。これは、先学が説くように、『枕草子』の「心ときめきする物、雀の子がひ」(二六段抜粋『新大系』)や「うつくしき物 瓜にかきたるちごの顔。雀の子の、ねずなきするにをどりくる」(一四四段・同)からの影響がある。更に、貴子歌が詠んだ「子を憶う鶴」と対照させて

源氏歌を見た場合、紫の上登場のモチーフである雀と鶴とは、右の如く定子周縁の文学にも見いだされ、これは偶然とは思えないのである。

### むすび―再び、鶴の子が鳴く時―

『易経』「繫辞上傳」に端を発する表現は、『源氏物語』濔標巻の明石君の歌も同意であることを示し小考の結びとしたい。

源氏は、明石君が明石姫君を出産した後、心づくしの贈り物をし、乳母を明石に向かわせる。そして、五十日の祝いを迎えるのだが、この折に源氏は歌も送っている。

海松や時ぞともなき陰にゐてなにのあやめもいかにわくらむ  
(『新大系』二一〇七頁)

というものであった。それに応じた洛中の源氏に向けての明石君の書簡は、以下である。

御返には、

数ならぬみ鳥がくれに鳴く鶴をけふもいかにと問ふ人ぞなき

よろづに思う給へ結ばほる、ありさまを、かくたまさかの御慰めにかけ侍る命のほどもはかなくなむ。げにうしろやすく思う給へおくわざもがな。

とまめやかに聞こえたり。(『新大系二』一〇八頁)

『新大系』脚注が、「人数に入らぬ私ごとき者の傍にいる姫君を、五十日の祝いの今日も、どうしているかと尋ねてくれる人はいない、の意。「み鳥」を明石君、「鶴」を姫君に喩え、「いかに」に「五十日(いか)」を重ねる」とする。「鶴の子」とは詠まれてはいないが、「み鳥がぐれに鳴く鶴」とは、明石の姫君の泣き声である。これは、親を慕って鳴く雛鶴を詠んでおり、五十日の祝いを言祝ぎつつも、明石に取り残された現状を訴えても居る。

のち、住吉詣の折、源氏の威勢に圧倒された明石君が参拝を遅らせることが描かれる。その折の明石君と源氏との贈答歌が、田蓑の鳥の情景とともに以下のごとく叙されている。

数ならでなにはのこともかひなきになどみをつくし  
し思ひそめけむ

田蓑の鳥に御褌仕うまつる御祓へのものにつけて、たてまつる。日、暮れがたになりゆく。夕潮満ち来て、入江の鶴も声をしまぬほどのあはれなるをりからなればにや、人目もつ、まずあひ見まほしくさへおぼさる。

露けさのむかしに似たる旅ごろも田蓑の鳥の名にはかくれず  
(同・一一六頁)

源氏歌は、「難波潟潮みちくらしあま衣たみのの鳥に鶴鳴

きわたる」(『古今集』雑上・読入しらず、古今六帖三)による」という『新大系』脚注の指摘通りだが、ここに先の『易経』「繫辞上伝」を重ねると、右の場面の鶴の鳴き声は、単なる情景描写というよりは、明石姫君が恋うて泣くのに応じる親としての源氏の声を、代弁しているようである。「繫辞上伝」とは逆に、子鶴が鳴くのに応じる親鶴という物語の展開に沿った順序で描き、親子の絆を示している。

## 注

- (1) 『源氏物語引歌索引』伊井春樹編 笠間索引叢書56 笠間書院 一九九四年
- (2) 藪葉子『源氏物語』における古歌の利用の様相―人物と出典の関係から―『武庫川国文 源氏物語特集』第七十一号 二〇〇八年三月
- (3) 久富木原玲「歌人としての紫式部―逸脱する源氏物語作中歌―」『源氏物語研究集成』第十五巻 二〇〇一年 風間書房
- (4) 甲斐睦朗「連載・若紫巻を読む23 鶴の一声」『日本語学』第6巻10号 一九八七年十月
- (5) 鈴木宏子「若紫巻と古今集」小島菜温子・渡部泰明編『源氏物語と和歌』青簡社(二〇〇八年十二月)。のち、『王朝和歌の想像力―古今集と源氏物語―』笠間書院

二〇一四年

中清の七日目の産養に際しての詠歌である。

(6) 鈴木久美「万葉集に詠まれる鶴の歌について」『白門国文』第18号 二〇〇一年三月

(7) 片桐洋一「松鶴図淵源考」『國語國文』(二九卷六号

一九六〇年六月)。のち、『古今和歌集の研究』明治書院

一九九一年三月

(8) 坂井多穂子「白居易と鶴」『人間文化研究所年報』第

一三号 一九九八年三月

(9) 柴格朗「劉禹錫と白居易の鶴を題材とした詩」『大阪学院  
大学人文自然論叢』三八 一九九九年三月

(10) 山田尚子「重層と連関 続中国故事受容論考」笠間書院

二〇一六年三月

(11) 本間洋一「王朝和歌の表現と漢詩文について—中古中世  
私家集の世界と「朗詠集」のことなど—」『和漢比較文学』  
第6号 一九九〇年十月

(12) 田中智子「述懐歌の機能と類型表現—「毛詩」「鶴鳴」  
篇を踏まえた和歌を中心に—」『むらさき』第五一輯  
二〇一四年十二月

(13) 小嶋菜温子「八代集・「産ぶ屋」の賀歌と『源氏物語』  
—若紫巻の「鶴」の歌から—」『國文学解釈と教材の研究』  
第49巻12号 二〇〇四年十一月

(14) 『元輔集』には、「中清が生まれて侍る七日の夜」と載せ、

(15) 金田圭弘「『源氏物語』若紫巻「あしわかぬ浦」について—紫の上登場とその背景—」『百舌鳥国文』第19号  
二〇〇八年三月

(16) 藤原克己「『源氏物語』若紫巻を読む」『日本文学』第35  
巻6号 一九八六年六月

(17) 吉海直人「『源氏物語』若紫巻の「垣間見」再検討」『國  
學院雑誌』第100巻7号(一九九九年七月)は、この歌を  
受けて尼君が、心乱れていることから、垣間聞き(垣間  
見されていたこと)を「失策だった」としている。

(18) 原岡文子「『源氏物語』に仕掛けられた謎—「若紫」か  
らのメッセージ」角川叢書41 角川学芸出版 二〇〇八  
年九月

(19) 三田村雅子「若紫垣間見再読—だれかに似た人—」『源  
氏研究』8 二〇〇三年四月

(20) 倉田実「若紫巻「養女養育婚姻譚」の生成—父と娘の「甘  
い蜜の部屋」—」『源氏物語の鑑賞と基礎知識⑤若紫』  
一九九九年四月

(21) 堀淳一「須磨流謫の光源氏と『毛詩』『周易』—「たづ  
がなき」から「退きて咎なし」へ—」『文藝研究』一三四  
号(日本文藝研究会編 一九九三年九月)。なお、『易経』  
から『源氏物語』への影響を説くものとして、池浩三「光

源氏の六条院―そのかくされた構想―』『中古文学』第48（一九九一年十一月）、及び、同氏「源氏物語の源泉―『易経』の卦爻辞をめぐって―」『岩波講座 日本文学史 月報』第3巻（一九九六年九月）がある。

(22) 『菅家文草』本文は、『日本古典文学大系』から引用し、元禄十五年刊本を参照しつつ、私に書き下しをした。

(23) 今井上『源氏物語』「雀の子を犬君が逃がしつる」鈴木健一編『鳥獣虫魚の文学史―日本古典の自然観―』2 鳥の巻（三弥井書店 二〇一一年八月）。『芸文類聚』雀部所引「続齊諧記」に、後漢の揚宝が、螻蛄に襲われていた雀の子を巾箱で飼育し、恩返しされる小話があり、これが元々の出典かもしれない。

\*勅撰集・私家集・私撰集は『新編国歌大観』から引用したが、私に改めたところもある。

（とくおか りよう・熊本大学非常勤講師・

熊本県立大学非常勤講師

実践女子大学大学院博士課程

平成十年度単位取得退学）